

発刊の辞 ～半世紀を超えて～

京都薬科大学長 後藤直正

かつて『京都薬科大学学報』（1953年～1966年；全14巻）が刊行されていた。その第1巻の「巻頭の辞」に、藤井勝也初代学長は「（筆者要約）大学の使命は教育指導と学術研究であり、学術研究はそれ自体の成果に意義あるだけではなく、さらに教育指導や人材の育成としての意義がある。そのようなことから、学術研究を行わねばならない、また奨励せねばならない。」と大学の使命と研究・教育との関係を述べられたあと、本学報の目的として「（原文のまま）研究の成果は随時各種の学会の機関誌等によつて発表せられて居つたが研究が盛んになれば本学自身に於いて発表せねばならぬことにもなり、また学内に於ける研究の業績を纏めて保存し置くことの意義もあり必要もある一漸く京都薬科大学学報として実現致すことになった。」と書かれている。それに沿って、本学報は学術論文と総説によって構成されている。

本学報の時代から半世紀を超えて、当時とは比較にならない社会で私たちは活動している。しかし、変わらぬもの、守るべきものはある。大学の使命は、研究成果の社会への還元であり、研究成果（科学的知見や思考）を教育に活かすということである。研究成果と言っても自己満足的なものであってはならない。研究によって得られた成果は論文として記録され、社会の目に晒され、批判され、そうして普遍性が付与される。こうして普遍性が積み上げられ、科学は進歩する。この一翼を担うのがアカデミアの役割ではないだろうか。論文は研究や研究者の優位性を評価するためのものではなく、科学の進歩を記録し、どこまで明らかになったのか、どこまで明らかにしたのかを後世に残す手段である。つまり、研究活動は記録されねばならない、“Scientist must write”である。しかし、論文を書くことには訓練が必要である。論文作成の作法、成果のまとめ方、構成など身につけるべきことは多々ある。一気に身につけることができるものではない。

本紀要は学術論文、総説、報告等を掲載するものである。自身の研究を纏めた総説や論文とまでには至らないが断片的な結果などを投稿して頂きたい。また極めて近い将来に評価を得ている雑誌に投稿することを目指す方々からの論文も奨励したい。現代の科学の世界で、所属する大学の雑誌に、それも日本語で書かれた学術論文を投稿する意義は高くはない。しかし、他者のアドバイスを受けるような、いわば登竜門と考えられて投稿されることは十分に意義ある。硬くならず、まずは書いてみて建設的な批判を頂けばよい。その積み重ねが将来を創ることになる。細胞生物学の領域で大きな業績を建てられた永田和宏先生がこんな歌を詠んでおられる。「これだけは捨てて行けない若き日の筆圧強き実験ノート」。本紀要を踏み台として成功され、本紀要に掲載された論文を若き日の思い出として頂きたい。

さきの藤井先生の巻頭の辞に「（謙遜と思われるが、体裁はまだ完成していないという意味のことを書かれたのち）近き将来体裁を新にし整ったものが出来ると思ふ。」とある。五十有余年の歳月を経て「学報」が体裁を整え、「紀要」として生まれ変わることができた。これは、偏に赤路副学長（研究科長）を始め、そのもとで参画戴きましたワーキンググループの方々のご尽力によるものであることをここに記し、感謝の意を表したい。

最後に、本学の一般教育分野の先生方が中心となられて1994年に創刊された『京薬論集』は本年3月発行の第26号を最終号として本紀要と合流したということを明記しておきたい。